２．自主防災組織からの取り組み・意見発表

Ａさん：　地域は、平成の名水百選に選ばれました本市のシンボル鏡川の南、神田小学校の校区の中にあります 38 の町内会で、人口は１万 8,000 人程度です。町内会連合会が主体となった広域的な自主防災組織で、結成のきっかけは、本県の自主防災組織の結成率が非常に悪いということなどを受けて、広域的な視点で防災組織をつくっていこうと、平成 18 年度に結成いたしました。

当初は、町内会連合会として、平成 13 年度に初めて地域的な防災訓練を行ってから、今年で 10 回目の取り組みとなりました。今年は地域の自主防災組織としては高知市で初めて、香南市にある第 50 普通科連隊に協力していただき、炊事車などを導入して行いました。

19 年度には地域の自主防災組織としては初めて、地域の 76 団体の事業者の団体と、地震で生き延びておれば、お互いの資材とか人材を活用して地域での復興、それから救助活動に共に協力しましょうという防災協定を結びました。

それらの活動が評価されてのことだと思いますが、平成 20 年度には国の地域安心安全ステーション整備モデル事業に指定され、100 万円の整備費をいただき、防災救助活動に必要な資材を購入して、これを活用した訓練なども行いました。

また、水道局の支援により、非常用の貯水槽の実演の指導もいただいたところです。

地域的な単位の町内会の取り組みとしては、私が所属する地区で単組の防災会を作っており、防災マップを作り地域の課題や歴史なども載せています。

今の大きな課題は、災害時の要援護者の台帳を作っていくこと。それから、防災訓練に参加者が少ないので拡大していくことだと思っています。

どこの自主防災組織でも今は当たり前の言葉になっていますが、自分たちの町は自分たちで守る。災害は老若男女、障害の有無にかかわらず、どなたにも襲ってくる。そういった中で、「天は自ら助くる者を助く」とありますが、要は自分で頑張ってないと駄目ですよということ。先だっての防災訓練で、自衛隊の方が「３日間はとりあえず自分たちで対応してください」ということを言われましたが、とにかく３日はかかるので、その間どうするかというのは、自分たちが自主的にやるしかないか思います。

「火事」と「葬式」、これは地域コミュニティの基本中の基本。こういった最低限の基本を昔から日本人は大事にしてきましたが、こういった視点で取り組みを進めていきたい。「自ら助くる者を助く」という視点での地域づくり。これは住民力にもなるし、今はやりの言葉の「無縁社会」の解消ということにもつながるのではないかと思います。

Ｂさん：　私どもの組織は、発足は去年度で、活動開始したのが平成 22 年の４月以降で

す。150 世帯ぐらいが参加しており、組織としては産声をあげたばかりですが、春野町の中には以前から取り組みされていた諸先輩方がおられて、我々も非常に心強く思っております。

取り組み等についてですが、防災には地域コミュニティの充実が不可欠だと思います。我々春野町森山地区は農耕地域で、昔ながらの田舎というところですが、やはり時代の変遷によって、人とのつながりが希薄になっていますので、今一度この組織を基にしてコミュニティのつながりを強くしたいと思っています。

そのためにはまず、昔あったお祭りごとです。今もありますが、参加しているのは小学生とその保護者だけという状態になっていますので、そこを、町全体、地区全体の取り組みにすることによって、コミュニティの再結成と共に防災意識の向上を導入すればいいのではないかと思います。そういうことをすることによって、防災で必要な共助が生まれきて、共助に自助が加わると、非常に防災に強いものになると考えています。

それと、防災技術は年々上がっていますので、防災学習といったものを行っていきたいと考えています。今年度は春野町内の自主防災組織の連合会の方の支援がありまして、高知大学の先生をお招きして学習会を行っています。他には、高知県の地震・防災課の担当者に来ていただいて、人間づきあいから始めて、いろんな学習の場を設けさせていただいております。

課題ですが、コミュニティの結束力が弱くなっているというところもあるんですが、防災組織の知名度が低いというところです。“あっ、あの人たちがやってるね”ぐらいで終わっていますので、やはり組織と地域の人々との連携というのが非常に重要です。組織をうまく住民の中に溶け込ませるという、このためにはやはり組織の活動を楽しく＝住民が楽しく、楽しく防災というわけじゃないんですけれども、そのような形にうまく連携できればいいかなと思っています。

今後の取り組みとしては、まず、どういう方がどういう状態で地区にお住まいになっているのかという調査や、我々の地域は農業従事者が非常に多いので、例えば資機材などもほとんど各家庭にあると考えてもいいため、どういう家庭にどういうものがあるかといった調査。また、地域の中の建設業をされてる方、医療に携わる方、情報技術をお持ちの方といった方々の能力、技術を使った組織づくりというのも視野に考えています。

今まで１年間活動して思ったことは、やはり資金力は要るのかなということです。いろんなことにお金は必要なので、行政に頼るのではなく、何らかの形でこの自主防災組織が活動できる資金づくりを考えています。例えば、産業振興と連携した取り組みができないかと考えてはいますが、課題は非常に多くあります。共助というところにスポットを当て今後も取り組みをしていきたいと思います。

Ｃさん:　私たちの集落は 98 世帯の小部落です。70 歳以上の男性が 21 人、女性が 50 人で、60 歳以上になると、男性が 45 人、女性が 73 人います。この数字を見ていただきますと、一家の中心は高齢者で、それも女性がかなり多いということが分かると思います。

自主防災組織は平成 13 年に結成されました。18 年には高知大学の先生に避難場所に適当であるかどうか現地を見ていただきましたが、全部駄目でした。

19 年に私が会長を引き受けた時に春野町は高知市に合併したので、市の職員が台帳を持って各家庭を回られましたが、その時、驚いたことに、私のおじいさん、おばあさんや昭和 2 年ぐらいに亡くなった人も台帳に載っていました。これを見て、実際地震が起こった時や津波が来たらどんなになるんやろうと思いました。

自分はその自主防災を引き受けてどんなことをしたらいいのかということで、当時の春野町役場に駐在する地域支援企画員に地域でどんな取り組みをしたらいいのか相談を持ちかけました。たまたま高知市の宅老所の指定管理を受けている場所で、勉強会や催し物、趣味の会とともに百歳体操や、看護師さんによる健康チェックなどを実施していましたので、その後に 40 分か 45 分ほど、毎月１回、高齢者への自主防災の講演を県の方に来てもらってやっています。

私も地域の大概の家庭の状況はもう頭の中に入っており、どうしても独居高齢者の方はたんす・テレビなど自分の寝る部屋に置きたがるので「たんすを倒れないように」と対策をお願いするができない。だから実際起こった時に、ここで寝ているという部屋に一番先駆けつけたらええと、こっちが納得する以外ないなと思ってやっています。

もう１つは勉強会と同時に、どんな防災マップを作ったらええだろうかということで、高校生にお願いしようと、昨年度、春野高校の先生にご相談して、自主防災に対して関心のある生徒４人を西諸木へ派遣してくれ、その生徒さんたちと相談しながらマップ作りをしています。顧問の先生も来ていただいて、学生さんと地域を全部回り、お年寄りとか地域の人たちと対話をして、「ここの塀は危ないですよ」といったことを話してくれています。ほんとに高齢者の方が喜んで、「あんたたちに助けてもらわなかったら、私たちは助からん。だから、ぜひ協力をしてください」ということで、現在は取り組んでおります。

この生徒さんとの防災マップ作りは５年計画で、次から次へ世代が代わっていく中で気がついたところをまとめて、私たちの地域を、10 の地域に割って防災マップを作っていきたいと考えています。13 年に作った防災マップは、調べたら１軒も持っておらず、消火栓がどこにあるかというのは、高齢者の方は分かりません。一番助かる方法はどうかということをその防災マップで作成していきたいと思います。

Ｄさん：　私は６歳の時に南海地震に遭い、あの当時を目に浮かべながら、防災に長年携わってきましたが、次世代の子どもたちに体験談を話したりといったこともしています。

私たち、宇佐地区町内会連合会は 29 部落で、地区の住民や小学校の子どもたちと、毎年 11 月に津波・地震が発生したと想定して自主訓練をしています。自主防災のマップを作って、お年寄りや子どもたちがいかに早く高台に避難できるか、敏速に逃げるかを毎年課題にしてやっています。

宇佐地区は人口の割に非常に家が密集しており、海岸沿いにありますので、もし津波が来たとしたら倒壊するブロック塀とが非常に多いことや、昼間の場合は保育園児が多数おりますので、誰が避難させるかということも課題です。

私たち防災班は（参考に）あちこちの組織を見て回ったり、話を聞きに行ったりして、地区の住民の津波避難訓練の時のことを話しあっています。この間は土佐市長に来ていただき、防災に関していろいろ話し合いをしました。

宇佐は目の前が海岸ですので、いかに高台へ逃げるか。そしてぜひとも宇佐の町に避難タワーを設置していただきたいという強い要望もありますが、今土佐市が私たちの地区でも防災公園を造っていただけるという話しになってきました。

これから防災公園造りと宇佐小学校・中学校、皆一体となって高台へ逃げることができるような組織づくりをしていきたいと思います。

Ｅさん：　私たち土佐市宇佐町旭町地区は、平成 14 年ごろから、すぐ近くにある神社の裏山の海抜 35ｍの山頂に、交代制で住民全員参加という形をとり、津波の避難場所を造りました。

約 250 人～300 人ぐらいを収容できるスペースがあります。この広場の一角に８畳の備蓄小屋を住民で造りました。ここに棚をいっぱい作って、100 世帯分の収納ケースに水や非常食、テント等を保管してあります。この小屋の裏にある 500ℓタンクには市の水道水を現在貯水しております。これは定期的に交換していますが、何年か後には、増やしていくことにしております。これにより、約 220～230 人の住民が３、４日の孤立でも飢えをしのげるという体制ができました。

また、すぐ津波が来ますので、ブロック塀対策や停電になった時の避難誘導灯も自分たちで購入して、現在７カ所設置しています。そして、各町内のあちこちに車いすも 11 台配置しています。そして、県所有の陸こう 21 カ所を自主防災会で管理しています。これがあらかたの取り組みの内容です。

そこで、津波についてですが、実は私、約４年余りをかけて徳島県から高知県の沿岸部、宿毛まで漁師たちの聞き取り調査を行いました。その結果、津波は地震と同時に地盤沈下して押し波が来るという地域が、徳島県を含めて分かっているだけで 12 カ所あります。甲浦では地震と同時に 4m50㎝の押し波が入っており

ます。それから室戸岬町三津、ここは地盤隆起するといわれたところですが、実際はここも地盤沈下して、3m50cm の津波が入っております。

このように、高知県では地盤沈下して押し波が来た地域があるわけです。問題なのは、このことを行政が知っているかどうかです。例えば昭和の時に徳島県では地盤沈下による押し波が５分～10 分で来て、逃げ遅れた住民が犠牲になりました。このことを役場の方々が把握しているかどうかです。恐らく把握していないから、港の中に数十億かけて津波の防潮堤を造っております。実際にそこへ行って測ったところ、地上高２ｍぐらいしかない。私はこのままいったら、また同じことが起こるんじゃないかと心配しています。このことを行政の方も把握したうえで、津波対策を具体的に進めていただきたいと思います。

Ｆさん：　私たち香南市赤岡町の一本松・高見・横町４区自主防災会は香南市の防災課の指導により、約 6 カ月間の住民同士の協議を重ねて、平成 21 年 1 月に発足しております。108 世帯、224 名の住民で組織している防災会です。

主な取り組みとしては、まず発足当初に香南市から補助金をもらい、防災資機材の完備をしました。城山高校の入口に１カ所と、保健センターに２カ所目の防災資機材倉庫を設置し、資材を分散して、万一の時にはいつでもその資材を使ってできるという体制を整えております。そして、防災マップを作成しました。これに併せて、平成 13 年に高知県西南部豪雨の時の教訓を 10 カ条に書いてくれていますので、これをＡ３のファイルに入れて全世帯に渡してあります。

それと全世帯の住民調査を 21 年度、22 年度にしました。住民の移動（の有無）とか、病気とかけがとかで避難に大変な家族がいることを自主防災会も把握しておかなければならないという観点から、今後も毎年、年度末には住民の調査をして、現状・実態把握をしていきたいと考えております。

防災訓練は、香南市が全域で毎年９月の第１日曜日にしていますので、これにあわせて赤岡町の消防団にも来てもらい、消火栓の接続方法、油火災の消火方法といった細かいことについても約２時間の日程で指導を受けています。住民全員が参加していくという形ですが、実際は、21 年は 46 名参加、22 年は 58 名参加となっており、まだまだこれから訓練を重ねていかなければならないと考えております。

それと、年２回環境整備活動をしています。これは香南市全域で一斉清掃を兼ねてしていますが、その時に、やっぱりみんなが集まって共に力を出し合ってやっていくという連携意識を高めていくことを目標にしています。

また、研修会・訓練等により自助・共助の訓練、体制づくりをしていくということを念頭に置いてやっています。

赤岡町の課題としては、町を分断するように香宗川が東西を流れています。そ

の香宗川の約１㎞間に土砂が堆積をして草がはえ、川が半分くらいの機能しか果たしてないという状況で、そういう中で津波が発生したと想定したら、香宗川を逆流する津波の水位は相当高くなってくると思うので、香宗川のしゅんせつを早急にお願いしたいと考えています。

私たち自主防災会は同区域内に、同じ住民で構成をするまちづくり自治会を立ち上げて、自主防災会の役員と同じメンバーで、会長以下 28 名の体制で運営をしています。今後は全員参加型の自主防災会に持っていかなければならないと考えております。そして、研修会をや先進地視察等を積極的に行い、住民が安全で安心して暮らせる地域づくりの実現を目標としていきたいと思います。子ども、大人、高齢者、３世代が共に力を合わせて、自分たちの地域は自分たちで守るということを全住民に理解いただきながら、併せて、自分の命は自分で守らないかんぜよということを徹底していきたいと考えています。まだ発足して２年足らずなので、先輩の皆さん方や、長い年月、運営をされている皆さんの実例を参考にしながら、住民を守るということを第一に考えて活動したいと考えています。

Ｇさん：　香南市赤岡町弁天地区は１区～５区まで、72 世帯 162 名で、絵金蔵や弁天座などの文化財があったり、小学校、保育園等があり、小さい子どもがいる地域です。平成 19 年に発足して、役員９名で運営しています。

主な取り組みとしては、他の地域の避難訓練は昼間が多いと思いますが、うちは夜間の訓練が主体です。前年、本年と 2 回、消防の方に注意点など聞いて行っています。72 世帯から 45 名ぐらい参加しているので、参加率としてはいい方じゃないかなと思っています。隣近所みんなが声をかけ合って避難するように心がけています。

いろいろ資材を購入していますので、消火栓の接続の方法や消火器を使っての模擬訓練を１年に１回ぐらい行っています。また、炊き出し訓練を１回しましたが、一遍に 50 人前ができますので、次回もこういうのを購入してやりたいと思っております。

平成 21 年の 1 月 2 日に弁天地区で火災があって、自主坊の方も消火活動を行い市長表彰を受けております。

今後の課題は、私たちの地区も非常に高齢者が多いので、どういうふうに避難させていくかということです。１区～５区の区画に自治防災会の班長を決めていますので、その班長や町内会長に言って、個人情報ではありますが、各家に、何人いてどの場所で寝ているかを提出してもらい、私が全部預かっています。

活動を継続していくためにも県からの支援も何かあったらいいなと思っております。

今後どのような地域にしていきたいかというと、やっぱり自分のことは自分で

守る。自分の地区は自分で守る。まず、各人、自分を大事にして逃げて、それから、みんなが、自主防が助けにいくという地域にしていきたいと思うので、訓練についても、各家庭から１名は必ず出てくれとお願いしています。同じような人ばかりが世話しており、その方たちが老齢化していますので、つなぎがいないということが今後の難しい面じゃないかと思っております。

Ｈさん：　佐川町中本町の概要ですが、佐川町の中心街にあり、世帯数が約 80 世帯です。自主防災については平成 19 年 4 月に準備会をやって、平成 20 年の 5 月に立ち上げています。

自主防災組織の主な取り組みは、まず、立ち上げ時に全世帯を対象にしてアンケートを実施して防災に関する意見や課題を集約しました。そして、それを皆さんの家庭に配って説明して、課題や問題点を共有するということをしました。その後、防災マップを自分たちの手で全て作っております。このことで防災意識と連帯意識が生まれ始めたような感じがしました。そして、課題が明確になったと思っております。

中本町では、佐川町は司牡丹で有名ですので、反省会は司牡丹を片手に、課題や課題解決方法を討議して、次へつなげていっております。それから、自分たちの力で防災倉庫の建設に今取り組んでおります。用具を購入しても置き場がありません。自分たちでやっているんだという連帯意識がそれで生まれるんじゃないかということもあり、とにかく自分たちでやれることはやっていこうと、今防災倉庫の建設を行っております。

それと社会福祉協議会との連携で、他の自主防災組織の立ち上げの手伝いをしています。佐川町内では今５地区、中本町の事例報告を話しに行き参考にしてもらっています。

それから、来年６月の設置義務化に先駆けて、住宅用火災警報器の設置を完了しました。他には、高吾北消防署や佐川警察署などと連携した防災訓練や学習を現在実施しております。

今課題になっていることは、中心街でありながら、子どもがいなくて、お年寄りばかり、それから独居世帯がほんとに増えていることです。今後どのように共助していけるのかが大きな課題になっています。この辺についても、自主防災として取り組んでいかなければと考えております。

それから、一時避難場所の公民館が古くて、雨漏り跡があるような平屋の木造なのでその安全性についても、今後どうしていくかをみんなで考えていこうと思ってます。

中本町では以前３年ほど続けて火事があり、尊い命も失っています。消火器の野外配置も今検討しているところです。皆さんが言われたように、地域のつなが

りを高めるためにどうしたらいいかというのは、ほんとに問題だと思います。花見や神祭など、もうちょっと盛大にやっていったらいいのではないかと話しております。

それから、防災無線は今どこも付けられていると思いますが、地形の関係か、非常に聞こえにくいのが課題です。私どものところでは災害時の情報源のラジオが聞こえません。夜になると韓国放送ばかり聞こえて NHK のラジオが聞こえない。当然、高知放送も聞こえない状況になっております。この辺の課題があります。

どのような地域にしていきたいのかについては、現在自主防災組織を立ち上げて、住民のつながりがほんとに高まったように思います。しかし、まだ十分だとは言えません。

これからの高齢化社会を考えると、そのつながりというのを強めて、継続していかないかんと思っています。そのキーワードとして「みんなで」というのを挙げてます。防災はもちろんのこと、地域の活性化に向けて、みんなが参加して知識や知恵を共有して、安全で楽しい町をつくりたいという希望があります。そのためには、常に生じる地区の課題を見つけて、解決に向けてみんなで行動することが大事と考えております。その一端に自主防災組織があればと思っていますが、その課題解決については、自分たちでできることは自分たちでやる。できないことは無理をしない。そして、誰かの知恵や力を借りて解決に取り組むというスタンスをとっております。

非常に微力なわけですから、いろんな組織を取り込んで、みんなでやっていけたらと考えています。例えば、まだ関わりのない県の土木事務所とかといったところも今後連携を深めて、防災意識を高めたり訓練したりということをやっていけたらと思います。

みんなの知恵を借りて、活性化の夢を語りながら次の世代がつなげていけるようないい町、住みよい町になるように頑張っていきたいと思いますので、協力をお願いします。